The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デ「フォー」と『フォー』 : 「ポスト」コロニアル主体は自らを名乗りうるか
Author(s)	服部, 典之
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2001, 35, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デ「フォー」と『フォー』

――「ポスト」コロニアル主体は自らを名乗りうるか――

服部典之

1986年に出版された南アフリカの白人作家J.M.クッツェーの『フォー』は、18世紀のイギリス人作家デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)(以下『クルーソー』)と『ロクサーナ』(1724)を下敷きに書かれている。この二作品はフィクションとしてはデフォーの最初と最後の作品である。『クルーソー』の作品としての一貫性はめでたく言祝がれ、『ロクサーナ』の結末は破綻していることで悪名が高い。最初のフィクションから最後のフィクションに至る5年の間にデフォーに重大な意識の変化が起こっていることを本稿で議論する。そしてこの意識の変遷を「模倣」したクッツェーの作品を対置させることで、現在の「ポストコロニアル」な状況の持つアポリアと、それにも関わらず「書き続ける」ことの重要性が前景化されている状況を指摘したい。

『フォー』の一登場人物であるフォーの名前は、デフォーが初期に使っていた彼の本来のファミリーネームである。デフォーは破産した後ウィリアム3世のお抱え論客として大きく身を変貌させるときに自ら改名しているのであって[1)]、クッツェーは自分の登場人物をデフォーの親の姓であるフォーに戻しているのだ。本稿では、このフォー←→デフォー(デ「フォー」)という名前のやりとりを念頭において、「名前を名乗る」という行為をめぐって、クルーソー、『ロクサーナ』の主人公、『フォー』の主人公スーザンに焦点を絞って考察することで、「主体」のありようと変貌をも

探ってみたい。なお、植民地主義が同時代として進行しており、それを正当化する言説に関わっていた18世紀的主体のありようを本論では「コロニアル主体」と呼び、クッツェーが執筆当時まだアパルトヘイト下にあった南アフリカにあって、被植民者と植民者の言説が入り乱れ緊張した政情の中で生き続けようとする主体のありよう、ひいては植民地時代を今なお引きずっている現代に関与しつつ生きる主体を仮に「ポストコロニアル主体」と呼ぶことにしたい。

> 私は1632年ヨーク市に生まれました。家柄は立派でしたが、父はこの国の人ではなくブレーメン出身の外国人で、最初はハルに住み着いていたのです。商売で一財産築いた後仕事をやめ後にヨークに住むことになったのです。その町出身の母と結婚しました。母の実家はロビンソンという名前で良い家系の出身で、そこから私はロビンソン・クルイツナーエルと呼ばれました。しかしイングランドの常で言葉の転訛(“corrupted”)が起こりクルーソーという名前で呼ばれるようになり、というかむしろ私たち自身で自分たちをクルーソーと呼び、そう署名もするようになりました。知り合いもいつもそう呼びました。2)

これは『ロビンソン・クルーソー』の冒頭部分である。クルーソーは自らの名前を宣言している。デフォーの書いたフィクションの主人公のほとんど全員が様々な理由で匿名であることを考えると、そしてデフォーのフィクションの出版がそもそも匿名で行われたことを考えると、この名前を断言する時のクルーソーの自信は異様なほどだ。

クルーソーに際だった事実として、自分の名前というものは出生時に所与のものであるはずなのに、もともとはKreutznaerという名前であった彼ら家族の名前が転訛により変化し、自らで自らに名前をつけている(“call ourselves...Crusoe”)ということに注目する必要がある。これはフ

ォーがデフォーと改名した動機を想起させる。自分たちの名前をつけるということは、過去から自分を遮断し自らを新しい存在として規定し直すということである。

植民者は被植民者に名前を与えようとすることを思い出そう。それは「名前を与える」主体である親や神の権限をその行動で模倣し、そのことによりその権力に自らを仮託するからである。つまりクルーソーの自己命名行為は、「コロニアル主体」が被植民者に名前を付け、自分の範疇によって鋳直す行為を自らに対して行っていることである。この意味で、ロビンソン・クルーソーは生まれたときからコロニアル主体なのである。この行為は後にクルーソーが自分の助けた一人のカリブ人にフライデーと名前を付けることの素地を形成する。

しかし、このコロニアル主体の傲慢な名前の宣言は同時にある種の不安表明にもなっていることに注意しなければならない。自らに命名するという行為は、その主体を「命名者」と「被命名者」に分裂させることをも意味する。また「転訛」(corruption) によって Kreutznaer という元来の名前が Crusoe になったということだが、それは名前の「堕落」をも意味し、過去からの断絶は起源の消失であり自己存在の不安の源泉とも成りうる。こうしてコロニアル主体は「自ら名乗る」ことで自らの権力を冒頭において誇示しながらも「無力感」をゆくりなくも露呈する。また自らの中に「被命名者」を抱え込むことで、受動的なもしくは敵対的な「他者」存在を引き受けることになってしまう。

コロニアル主体にとっての「他者」とは何であろうか。クルーソーについて見てみよう。クルーソーが島で24年間一人きりであった事実から彼の「孤独」が強調されがちだが、クルーソーの生活の最も大きな原動力は「他者」の影だったのではないか。波や獣や蛮人が表象する「他者」に呑み込まれることをクルーソーは最も恐怖する。呑み込まれる恐怖は呑み込

みたいという妄執的な行動を誘う。難破船の残骸から執拗に物を搬出することで船を解体し象徴的に「呑み込む」。

クルーソーは「自分には多くの物が欠けていたのです」(77) などと再々言う。物をため込むことはそもそものクルーソーのこのような欠落感に由来している。一体何が欠落しているというのか。クルーソーは自分の時間に秩序を与え、眠る以外の全ての時間を統御し労働で埋め尽くし、物を生産し欠落を埋めようとする。しかし埋め尽くすことはできない。そして、自分を襲う他者を怖れグロテスクなほどの城塞を築いてゆく。クルーソーの他者恐怖と物の欠落感は心理的にどこかで結びついているようだ。

また彼の他者恐怖は他者願望の裏返しのようにも見える。コロニアル主体にとって自己の一体性を確保するためには「他者」、すなわち植民される被支配者を必要とするのではないか。征服されるべき他者＝原住民が不在であるとき、彼の主体は不全である。コロニアル主体は自らを規定するとき、被植民者という他者を可視化させその存在を構築した後、遡及的に自らの主体を確立する。

「他者」が不在であるとき、不在はコロニアル主体たるものに大いなる不全感＝欠落感を生じさせ物の蓄積というずらされた形での補塡に走らせる。自分の満たされない気持ちを物によって満たそうとする代替行為である。そして他者不在は「他者」を表象するものへの恐怖となって現れてくるのだ。とするとクルーソーがクルーソーであるためにはフライデーの登場を待たなくてはならないことになる。それまでは彼は不完全な植民者であり、「他者」の「欠落」を抱えた神経症的欠損主体たらざるを得ない。

作品中クルーソーが二度見る夢とそれに密接に絡まった神への信仰の問題は、欠落の不安におののく彼の植民活動を支援する。彼が唯一統御できない時間である夢は、彼を統御する駆動力となる。一度目に恐ろしい形相の神が夢に登場した後、クルーソーは聖書を読むようになり改悛への道を

進むことになる。この時彼が感じた根本的疑問は次のようなものである。「今まであれほど見てきた地球と海とは何なのだろう。どこからそれは産まれ、私は何なのだろう。...そして私たちはいったいどこからやってきたのか？」(92)

万物の第一原因を尋ねるこの質問の解答は当然造物主である「神」ということになるわけだが、神への祈りによって神経症が癒えたクルーソーが、この後自信に満ちた着実な植民活動に邁進できるのも理解に難くないところだ。「神」の存在はクルーソーの中で「支配者」と「被支配者」の関係の祖型となり、彼自身の島全ての「被支配物」に対する彼の優位を保証するのであるから。

この後のクルーソーの姿は「近代人クルーソー」像の基盤となった、何事があってもくじけず堅忍不抜の精神で努力を持って生活を築き上げる一見立派な姿である。彼は欠如を思うのでなく享楽を思うべきだ（130）などと一時的に述べ、「欠乏」という病気は完治したかのようだ。しかしこれは夢に現れた神の幻影に保証された束の間の健康のファンタズムであったことは、作品の半ばから登場する足跡やバラバラ死体によって、クルーソーが再び他者の影に追い回されることで明らかである。

食い散らかされた死体の残骸によって征服すべき他者が可視化する。それはカニバリズムを行った蛮人たちである。この後クルーソーの内部では二つの声が激しい議論を応酬する。非人道的な行為を行った蛮人を処刑すべきだという声と、処刑こそが非人道的で許されるべきではないという二つの声だ。

後者の声は反コロニアル言説であり、クルーソーは一時その声の慫慂に従い、自分自身が島の自然の一部になり、島の動物たちの王であることに満足し老いた山羊のように朽ち果てていこうとまで夢想し、植民者たることを放棄したかに見える。そんな彼が「やむなく」蛮人を撃ち殺すことに

なったのは、その前に見た作品二度目の夢の担保があったからである。その夢はまさに食人の餌食になろうとする蛮人の一人を救い出すというものであった。この夢は甘い他者希求へとクルーソーを誘う。他者はすなわち自分に救われ忠誠を誓う奴隷である。夢は現実となり、夢の誘いに乗って奴隷となるべき一黒人を救出するため、摂理の声の導くままに二人の蛮人を殺害することになる。個人の責任は回避され、反コロニアル言説は神の摂理によって圧殺されるのである。

ここで見誤ってはならないのは、慈善や平等主義といった反コロニアル言説とコロニアル的行動は両論併記されているように見えて、実はその両者をちゃんと見据えている点こそがまさにコロニアル言説だということである。反コロニアリズムはコロニアリズムに対するアンチテーゼとして生まれたのではなく、コロニアリズムと同時に生まれ共犯関係を結んでいる[3]。強引な植民活動や現地人殺害等への批判があることをも十二分に承知しながらも、「やむなく」蛮人虐殺へと向かわざるを得ないという物語の展開こそがまさにコロニアル言説そのものなのだ。クルーソーの「逡巡」は、正義や良心の葛藤であるかのように書かれているがこれは詐術としての修辞法である。

コロニアル主体は、そもそも「他者」という欠損＝破綻を背負い込んでいた。破綻せざるをえないコロニアル主体はそれを遅延させるために他者を構成し可視化する。Homi Bhabaの言う「矯正＝再構成された認知可能な他者への欲望」[4]を満たしていく必要がある。被支配者を次々と「再」構築し、敵対的な他者は次々と虐殺していかなくてはならない。この活動は、終わりなきファンタズム的反復である。コロニアル物語は終わらない。『クルーソー』は二部に続き、二部は三部に続き、『クルーソー』物語は“The Robinson Crusoe story”[5]となって数限りない作品を後生に産み出すことになった。

『クルーソー』物語は、かくして一見破綻を迎えることなくヴィクトリア朝に連綿と続いていったわけだが、その一方で『ロクサーナ』はヴィクトリア朝において全くと言っていいほど忘却に沈んだ。作品の冒頭を見てみよう。

> 私が生まれたのは、友人たちによりますと、フランスのポアクトゥ地方（または郡）のポアクティール市だったということです。そこから両親に連れられてイングランドにやって参りました。両親はプロテスタントたちが迫害者の圧制によりフランスを追われた1683年頃、宗教上の理由で亡命してきたわけです。6)

『ロクサーナ』の主人公の名前はロクサーナではない7)。彼女は作品で自らの名を名乗ることは決してない。それどころか、生まれた場所も伝聞による情報でしか彼女は知らない。この情報提供者である「友人たち」とはいったい誰のことか？

男性遍歴を繰り返しその度に蓄財を重ねていく彼女を第一義的に植民者と言うことはできないかもしれないが、彼女の病的な増殖＝反復衝動はクルーソーのそれと性質は同じである。彼女の終わりなき蓄財活動の契機となったのは、最初の夫の出奔→不在とそれに伴い無一文になり、住んでいた家の家主に身を任せたという事件であった。クルーソーと同じくどうしようもない不全感＝欠落感が一連の行動の引き金を引くのだ。

彼女の匿名性はデフォーの作品群の中でも際だっている。他の作品の主人公は自分の名を名乗らない理由と言い訳を必ず冒頭で述べるのだが、『ロクサーナ』の主人公は名乗るけはいすら見せない。彼女の匿名性は物語の前提であり、絶対のものであるのだ。

匿名であり基本的に表立った行動も行わない、主体としては不全な主人公を行動者として支援するのは女中のエイミーであり、まだそれでも補え

ない欠落を埋めるのが次々と彼女の魅力の虜になる男たちである。主体の欠損を行動する他者や金を貢ぐ男によって補う彼女は、まず他者を規定してから遡及的に自己の一体性を確保するコロニアル主体の資格を備えている。彼女の欠損の補完者たちは作中「友だち」(Friends) と呼ばれている。冒頭の友人たちが出身地情報の欠落を補ったことからも分かるように、『ロクサーナ』の女主人公は自分の前に現れる様々な男や女という他者を「友だち」として自分の内部に取り込み自己の一体性をかろうじて保つ。彼女の強迫観念になっているのは最初の破産体験である。彼女の場合破綻は破産である。破産を孕んだコロニアル主体である。

破産の恐怖に駆り立てられ、埋めることの出来ない主体の欠損を繰り延べるには、男を消費する生活を次々と更新していかなくてはならない。そして彼女に敵対する他者である彼女を捨てた最初の夫、彼女を恫喝するユダヤ人はどういうわけか死んでいく。それどころか、彼女と関係を持った男たちの中で家主＝宝石商もフランス皇太子も死亡する。彼女とつきあった男たちはそのほとんどが悲惨な目に遭うのだ。『ロクサーナ』の主人公は男を他者として取り込み消費し、彼らの生命を担保に主体を保っているかのようだ。

彼女は自分で名乗ることはないわけだが、唯一作品中で他者に仮名を与えられる場面がある。官能的なトルコダンスを披露するエピソードで、この時男たちにつけられた「名前」がロクサーナであった。彼女の初めての名前は隠れ蓑としてのそれであり、決して実体を露呈するものではなかったが、結果的にこの名前は彼女に破滅をもたらす。他者を自分に仕える「友だち」として規定し消化することで生きてきた彼女は、かりそめにも他者に規定されてはならないのだ。

この時たまたま女中として働いていた、彼女が最初の夫との間に設けた長女が、自分を認知するようにという要求を持って彼女に迫ってくる。こ

れが『ロクサーナ』の最後の部分、一見作品が終わったかに見える後に付け加えられた、身の毛のよだつような追跡と逃亡のドラマに繋がってくるのだ。娘はスーザンという名前であり、彼女の名前によって初めて主人公の本当の名前が確定される。「...一言で申しますと、エイミーと、それからスーザン（というのも彼女は私と同じ名前だったのです）は親密なる交際を始めたのでした。」(205)

これは主人公にとって致命的な事態である。確かに娘の名前の確定によって遡及的に母親である自分の名前が確定するという状況はコロニアル主体の自己規定のありようと似通っている。決定的に違うのは、コロニアル主体が自己を隠匿しながら他者を規定して自己保証を確保していたのに対し、スーザンの場合娘という被支配者によって名前が確定されたとき権力主体が可視化し、匿名性でこそふるえた権力基盤が潰えるという点である。

クルーソーは冒頭で名を名乗ってはいるのだが、彼にとっての被支配者に絞って考えてみよう。クルーソーは「フライデーに『主人』というのが私の名前だと分からせてあげました」(206) と言うように、フライデーにとってはご主人（Master）であり、蛮人によっては魔法の光で自分たちを殺す怪物であるし、最後反乱者によってクルーソー島に連行されクルーソーに助けられたイギリス人たちにとってはガバナー（govenour）[8]であり、決して彼はクルーソーと呼ばれることはない[9]。権力の不可視性を存分に行使しているわけだ。ロクサーナも名前が確定される瞬間までは権力を保持し得たのだが、名前が判明し過去の所行と行為者がイコールで繋がれた瞬間最初から抱え込んでいた破産が顕在化してしまう。

主人公を執拗に追い回す娘スーザンは、行動者エイミーによって殺害された「ようだ」。しかしあくまでも事実は判明しない。クルーソーの不安は虐殺によって延期され、物語はさらに次に続くという形の「未決状態」で終わるが、『ロクサーナ』の主人公の不安は娘の殺害でも解消すること

がない。作品最後の部分を見てみよう。

> ここで何年か裕福な、そして外見には幸福な境遇で暮らしました後、私は恐るべき災難の人生に転落いたしました。エイミーもそうです。私たちの以前の良き時代のまさに逆転でありました。天の報いが、私たち二人によってあのかわいそうな娘になされた罪の上に下ったようでした（“seem'd”）。そして、私はまたたいそう低い境遇に落ちましたので、罪の結果悲惨さがもたらされたのと同様に、悲惨な境遇に陥ったというそれだけの原因のために、後悔の気持ちを感じたようでした（“seem'd”）。(329-30)

特徴的な単語がseem（ようだ）という語である。作品を通して順番に蓄積され確定されてきたはずの因果律の鎖は、作品の最後に来て「ようだ」という見せかけの因果律に堕落し、物語は結末のない状態へと融解していく。『ロクサーナ』の物語は文字通りの「未決」によって破産してしまう。

『クルーソー』において、生まれたときに与えられた名前に経年による実体が付与されたとき人間の進歩が保証されるという機械的因果律は、作品の途中まで真実のように見える。ところが、彼の不安の解消と次に続く蓄積を保証しているのが借りものの神の「名前」（“in the Name of God” 234）であることを彼自身が白状したときその根拠を失うのだ。

この認識の水平が浮上するにはポストコロニアルの時代を待たないといけない。19世紀の帝国主義時代のイギリス人や植民地拡大を計る世界の各国には『クルーソー』の進歩による調和は誠に正しい模範的訓辞であった。彼らにとってクルーソーに突きつけられていた破綻は見えなかったし見ようともしなかった。同じ時期、破産が顕在化した『ロクサーナ』は忘れられてしまった。

「自らの名前を名乗る」という行為を機軸にして、デフォーにおいてコロニアル主体の破綻の隠匿からコロニアル主体の破産の顕在化という状況へと変換していった事態を、概観した。デフォーは『ロクサーナ』の後フィクションらしいフィクションを書くことができなくなってしまった。デフォー自身商売の失敗で何度か経験した破産を、フィクション制作においても何らかの意味で経験したのではないだろうか。

この大きな変遷の状況を現代の「ポスト」コロニアルな状況に置換し、新たなテキストとして産み出されたのがクッツェーの『フォー』である。『フォー』の主人公は『ロクサーナ』の主人公と同じ名前のスーザンであり、姓のバートンは「名前」の転訛（“corrupted”）によりBertonがBartonになったという。クルーソーの名前の「堕落」の反復である。彼女は作品の冒頭、乗船していた船で起こった反乱により殺害された船のキャプテンとともに海に流され、孤島に漂着する。浜辺に横たわるスーザンの上に立ちはだかる黒い影として現れたフライデーに背負われ島の主人であるクルーソーのもとに連れて行かれる。

クルーソーに彼女が英語で話す最初の言葉は次の通りである。「私の名前はスーザン・バートンです。私はあそこの船の船員たちによって海に流されました。あの人たちは主人（“their master”）を殺し、私をこんな目に遭わせたのです。」[10] スーザンは自らの名前を島の統治者に宣言している。船長はスーザンの情夫であったことが後で判明する。船長が主人（master）であったという事実は彼女を被支配者に見せる。しかし情夫を亡くした彼女の境遇は『ロクサーナ』の主人公の初めのそれと等しく、その意味で彼女は作品の主人公たる資格を有している。なるほど『ロクサーナ』のスーザンと違って名前を告げる彼女は「主人」公であることを公言しているようだ。

しかし同時に彼女は『ロクサーナ』の娘スーザンのような他者性をも兼

ね備えている。失った自分の物語を取り戻そうとするスーザンは、かの娘スーザンのような執拗さでマスターナラティブを追い回すからだ。また彼女は『クルーソー』から排除されていた「女性」でもある。『フォー』の物語は、スーザンという被支配者＝被害者であり周縁に追いやられた「他者」の反逆として始まっているのだ。

スーザン・バートンはクルーソーを難詰し「島＝物語」を巡っての覇権争いを繰り広げる。クルーソーを追求し、クルーソーに身を任せ、クルーソーは死亡する。2部になって姿を見せるフォーは1部のスーザンの漂流物語を執筆してくれるはずであるが、彼女はフォーを問いつめ、フォーに跨り（“straddled him” 139)、フォーはひからびた死体になる。『フォー』はある言い方をするなら、「他者」であるスーザンが簒奪された「物語」を奪還する物語だ。

このように徐々に自らを主体として構築していくスーザンは、激しい他者渇望の気持ちを募らせていく。クルーソーの欲望に応えた後に彼女がその関係を心の中で整理しようとするとき、次のように彼女は思う。

> 私たちは他人の抱擁に身を任せ、波のうねりに身を委ねる。まばたきをする間私たちの警戒心が緩むのだ。…この目のまばたきは何なのだろう。それに抗することのできるのは、永遠の非人間的な覚醒のみなのではないか。まばたきとはひびであり隙間であって、その間隙を縫ってもう一つの声、他者の声が私たちの人生に語りかけてくるのではないだろうか？何の権利があって私たちはそれらの声に耳を塞ぐことができるのだろう？(30)

このスーザンの渇望は痛切である。他の箇所でも繰り返されるこのような想いには共感を覚えずにはおられない。しかしそのような発言のうち、次の箇所で欲望に応えてくれようとしないフライデーに向けた言葉を聞い

てみよう。

> フライデー、言葉の世界に生きている私たちが自分たちの質問に答えてもらいたいと感じるときの渇望を、どうしたらあなたに分かってもらえるのだろう。それは、私たちが口づけをするとき、その人の応えてくれる唇を感じたいという欲望に似たものだ。(79)

この箇所を読んで気付くことは「私たち(us)」というのは、言葉の世界に住む西欧社会の人間であったのだ、ということである。彼女が構築した主体は、実はまさに彼女の攻撃対象であったはずの「コロニアル」主体だったのだ。

いくら想いが痛切であっても、違った世界に生きる人間は彼女の想いを共有できずそれに応えることはできない。フライデーはそういった人間だ。しかし、他の人物は彼女の想いに自ら溺れていく。知ってか知らずかスーザンというコロニアル主体の「他者」として包摂されていく。船長の死亡はスーザンとの性的関係に関連がありそうだ。クルーソーはイギリスに帰還する船の中で死亡する。フォーも死亡する。スーザンが他者として認知するのは性的欲望の対象になる男性である。彼女は欲望の痛切さを男に投影し性的結合によってその解消を図るが遂に癒しは得られず、男はその欲望の火に身を投じて死んでいく。『ロクサーナ』の主人公スーザンの男たちと同じだ。

『フォー』のスーザンは他者をこのように消費するが、代価としての他者を生産することもない。自分が産んだ娘はバイアに消息を絶つ。ロンドンでスーザンのもとに現れ、認知を求めるスーザン・バートンという同じ名を名乗る女の子の訴えにもかかわらず、そしてその娘がスーザンの実の娘だというフォーの主張にも耳を貸さず、決して認知しようとしない。デフォーの『ロクサーナ』の二人のスーザンの踏襲である。

フライデーと二人での旅の途中見かけた、布にくるまれた不可思議な胎児の死体、また4部で垣間見える階段に転がっている娘の死体、これらはスーザンが産み出し得なかった流産の子供たちであり、認知せず存在が無化された「欠落」である。

スーザンは男を遺失し、子供を遺失する。そして一度は奪還したはずの「物語」をも遺失する。彼女は「女性作家」(authoress) として物語を生産しようと努力する。だが「物語」を語ろうとする「努力の物語」はひしひしと伝わるものの、最終的にスーザンはメタ物語であり、「物語」の「遺失」の物語という「堕落」なのである。4部になって、デフォーの『ロクサーナ』のように語り手は匿名に戻り、匿名の「私」が物語を受け継ぐが、この語り手の描写するひからびた死体であるフォーとスーザンを見る限り、覇権抗争を繰り広げた二人は共倒れしてしまったようだ。なぜ一度はスーザンに奪取された「物語」は破産してしまうのか？

『フォー』のスーザンは男を蕩尽した。それは快楽のためであると同時に批判的消費であった。パトリアーカルな物語への批判からその転覆を謀り一度は回復に成功した。しかし復活した物語は彼女の手から滑り落ちてしまう。コロニアル主体への批判から主体を解体する試みで始められた企図の末にスーザン自らがコロニアル主体として君臨することは、深いレベルで結局コロニアル主体とそもそも共謀関係にあった批判主体を暴露し、結果として自分自身を蕩尽させてしまうのである。

このような「ポスト」コロニアルの認識水平が姿を現すときの要として浮上するのがフライデーである。スーザンは一時期、フライデーの強いられた沈黙を正しく解釈している。つまり、奴隷商人に舌を切り取られ言葉を剝奪された『フォー』のフライデーは、西洋的コロニアル主体の欲望に「応じて」日々再構成されていくという事態に対抗する防御手段を持たないということを (121)。

しかしフライデーは西洋的usによって強いられた沈黙とは別に、自ら選び取った沈黙を持っている。「沈黙」であるからそれは転覆的抵抗にはなりえない。しかし彼の沈黙は強靭である。フォーのガウンを羽織って踊るときの沈黙がそれであり、単調な節のメロディーをリコーダーで吹き続ける声なき抵抗、スーザンがフライデーに調和しようと伴奏のレコーダーを吹く音を「黙殺」して吹き続ける時の沈黙もこの強靭さを示す。

作品の最後のフライデーは象徴的にこの沈黙という抵抗手段を「静かに」行使する。残されるのは深海に沈んで舌の無い口蓋の奥底から流れを吐き出し、その流れによって世界中を洗い流すフライデーの声のない沈黙の物語である。

以上、「コロニアル主体が自らを名乗る」という状況に内在する詐術的レトリックを、ロビンソン・クルーソー、スーザン・バートンに関して分析し、「コロニアル主体が匿名である」ことを貫き通すことの不可能性を『ロクサーナ』のスーザンに見た。『フォー』という作品が「模倣」した『クルーソー』から『ロクサーナ』へのコロニアル主体破産までの経緯を辿り、コロニアル「従属体」であるフライデーの沈黙に行き着いた。

デフォーが身をもって体験したこと、そして『フォー』が意識的に模倣したこと、それは「コロニアル主体は破綻（＝破産）せざるを得ない」というポストコロニアル的認識であった。しかしこの認識を「声」に出すことの不可能性を『フォー』は同時に突きつけている。その認識をはっきり口に出して宣言すると、ポストコロニアル主体はコロニアル主体がもたらした莫大な被害をもその歴史認識の中に埋没させてしまうことになり、自らコロニアル主体の共犯者であることを告白してしまう。ポストコロニアル主体がコロニアル主体の罪を暴露するとき、この批判主体は「名前を問われる」ことで責任所在を明確化することを求められるだろう。その時本当に純白の潔白さで「名前を名乗る」ことはおそらく不可能である[11)]。

「自らを名乗る」ことはできないが破産宣告をしなくてはならないというスタンスをポストコロニアル主体が示そうとすると、ポストコロニアル主体は「声」を遺失し「沈黙」に陥らざるを得ない。『ロクサーナ』が最後に陥った未完という「沈黙」、『フォー』の中の死亡した男たちの「沈黙」、『フォー』の4部に語り手の役割を降り（降板させられ）たスーザンの「沈黙」、中でもフライデーの「沈黙」は、この種の沈黙なのである。

『フォー』の4部でフライデーから流れ出る水の流れを顔と眉毛に感じ取る「私」のポストコロニアル主体は「自らを名乗り」えていない。彼は状況を感得しているが働きかけを行う主体となりえていない。

コロニアル主体もポストコロニアル主体も主体としての十全性を欠いており、「不全」＝「欠如」を顕著な特徴として持つ。しかしスーザン・バートンが言うように、書くことに「欠く」ことはなく、紙に書かれた言葉は全世界に拡がる反響力を持ちうる（93）。ポストコロニアル主体は「書き続ける」のだ。「言葉」はただしスーザンの認識とは違って西洋の「私たち」の独占物でもないし、ペン＝ファロスを持つ「男」の独占物でもない。作品最後のフライデーの奥底から吐き出される沈黙の流れもまた言葉である[12]。

アパルトヘイト下の南アフリカで英文学教師として生きていた白人クッツェーは、「ポスト」コロニアル言説の無力さを身をもって感じていたであろう。クッツェーに出来ることは、沈黙を書くという脱構築的＝自己揶揄的な身振りによって、読者を震撼させる道化を演じることだけだったのではなかっただろうか。だが、その震撼は、各々異なったポストコロニアル的状況を生きる読者にとって、たとえようもなく深いものなのだ。

注

1) Paula R.Backsheider, *Daniel Defoe-His Life* (Baltimore: The Johns

Hopkins University Press), p.102.

2) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (Oxford: Oxford University Press, 1972), p.3. 以降引用はページ数のみで示す。

3) 「共犯性」の概念に関しては、木村茂雄「「ポストコロニアル性」とナイポール」(『英語青年』2001年9月号) 参照。

4) Homi Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994), p.86.

5) Martin Green, *The Robinson Crusoe Story* (University Park: Pennsylvania University Press, 1990)参照。ただしグリーンは『フォー』をクルーソー物語の一つとしてしか評価しておらず、彼によれば『フォー』は一つの「歴史的幻想」であり、「モダニズム的改作」でしかない。

6) Daniel Defoe, *Roxana* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p.5. 以降引用はページ数のみで示す。

7) 原タイトルは次の通りである。*The Fortunate Mistress: or, A History of the Life And Vast Variety of Fortunes of Mademoiselle de Beleau, afterwards call'd the Countess de Wintselsheim, in Germany. Being the Person known by the Name of the Lady Roxana, in the Time of King Charles II.*

8) イギリス政府の認めた公式の植民活動の位階である「ガバナー」が用いられている。

9) そもそもクルーソーが自分の名前を名乗るのは作品を通じて3カ所しかない。つまり冒頭部分と作中日記の一行目、それとオウムのポルに名前を教えるときのみである。

10) J.M.Coetzee, *Foe* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p.9. 以降引用はページ数のみで示す。

11) Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999), p.191 はこの事態を「ポストコロニアル的人間は、批判しそこに安住している構造に対して、道徳の欠如を問うことはできない」という別の言い方で描写している。

12) 「比較言語文化論 —— 言語文化の境界 —— 」(『言語文化学概論』大阪大学出版会、1997), p.30 で木村茂雄はこの沈黙に関して「苦悶や抵抗や発話の可能性」を正確に指摘している。

(文学研究科助教授)

SUMMARY

De-Foe and *Foe*

—Can the "post"colonial subject announce its name?

Noriyuki HATTORI

J.M.Coetzee's novel *Foe* bases itself on two of Defoe's works — *Robinson Crusoe* and *Roxana*. It "mimic"s the important change undergone in Defoe's consciousness between 1719 to 1724, when colonial ardour proudly pronounced in *Crusoe* degenerated into a sombre prospect represented as inward "bankruptcy" in *Roxana*.

In this article I focus on the act of announcing one's name differently described in those three works. The analysis of these differences elucidates the fact that the colonial subjectivity initiated in Crusoe which was to propel the colonizers' territorial expansion harboured a latent bankruptcy—that bankruptcy symbolized most manifestly in *Roxana's* suspended ending and her divulged anonymity.

The collapse of the colonial subjectivity is repeated phantasmagorically in *Foe*. The postcolonial subjectivity of the anonymous "I" in the part IV of *Foe* is symptomatically critical of the colonial subjectivity in the novel, but is doomed to silent awareness of its impotence (of declaring him/herself). The silence itself is not inertia since it is a silence Friday wields as a weapon to make up for his lack of tongue. It is itself a silent declaration of a name not to be prescribed in Eurocentric terms.

キーワード：英文学　ポストコロニアル文化　J.M.クッツェー　ダニエル・デフォー